



インドの宗教と現代

150781162 橋本優希

はじめに

- a) 現在のインドの首相：ナレンドラ・モディ
 - ア) インド人民党（ヒンドゥー至上主義）
 - イ) ヒンドゥーの伝統によってインド統一の思想
→イスラム教徒排斥の風潮を助長
 - b) イスラム教徒への暴行事件
 - c) インドは特別な位置における
 - ア) 様々な宗教、人種が共生
 - イ) カーストや宗教、思想の違いによる争いが頻発
- ↓
- 世界の紛争問題にも関係??

インド

a) 地域 . . . 南アジア

b) 国家体制 . . . 連邦共和制国家

c) 首都 . . . ニューデリー

d) 人口 . . . 1 3 億 3 9 0 万人、世界第2位

→ 2 0 3 0 年頃には中国を抜き 1 位になる可

能性

インド

e) 1858年からイギリスの植民地化

→1947年にイギリスから独立

f) 民族

ア) アーリヤ系

イ) ドラヴィダ系

ウ) オーストロ・アジア系

エ) シナ・チベット系

インド

g) 言語・・・260言語、公用語は15

ア) ヒンディー語

イ) ベンガーリー語

ウ) テルグ語

エ) マラーティー語

オ) 英語

インド

h) 宗教

ア) ヒンドゥー教徒 79.8%

イ) イスラム教徒 14.2%

ウ) キリスト教徒 2.3%

エ) シク教徒 1.7%

オ) 仏教徒 0.7%

カ) ジャイナ教徒 0.4%

第1節 ヒンドゥー教

①ヒンドゥー教の歴史

a) インダス文明の誕生

ア) 紀元前2300年頃

イ) インド亜大陸の北西部地、インダス川流域で栄えた文化

ウ) ヨーロッパからアーリヤ人が移住

① ヒンドゥー教の歴史

a) ヴェーダ

ア) インダス文明衰退後にできた宗教文書

イ) ヴェーダ = 知識

b) バラモン教（ヒンドゥー教の母胎）

ア) ヴェーダを基礎とする

イ) 最高地位・・・バラモン（祭司者）

ウ) 男性優位社会

①ヒンドゥー教の歴史

c) バラモン教の社会制度・・・ヴァルナ（皮膚の色、身分による4集団）

ア) バラモン（祭司者）

クシャトリヤ（王族、軍人）

ヴァイシャ（農民）

シュードラ（奴隷民）

d) 職業は世襲化、婚姻関係は同一の集団内

第1節 ヒンドゥー教

①ヒンドゥー教の歴史

e) バラモン教と先住民の信仰が融合

→新しい民族宗教としてヒンドゥー教が
確立

→ヒンドゥー教はバラモン教を母胎とし、
それを継承

②ヒンドゥー教徒の規範

a) マヌ法典

ア) ヴァルナの秩序

i) バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシヤ、
シュードラ

→後のカースト制度とは別物

ii) 男性優位社会

iii) 女性の地位は最下位のシュードラと同等

→サティの文化

③ ヒンドゥー教の神々

a) 多神教

ア) ブラフマー (宇宙の創造神)

イ) ヴィシヌ (保護神)

ウ) シヴァ神 (破壊と創造の神)

→ 三者が最高神

その妃、化身、子孫が崇拝対象

第2節 イスラム教

①イスラム教概要

a) 地球上の人口68億人のうち、約15億人がイスラム教徒

b) インドの人口の13.4%がイスラム教徒で二番目の数

c) 「イスラム」 = 「神にすべてを委ねる」

d) イスラム教徒の総称「ムスリム」

「ムスリム」 = 「神にすべてを委ねる人」

第2節 イスラム教

②イスラム教の始まり

a) 紀元610年

b) アラビア半島の都市メッカ

c) 預言者ムハンマド

d) 唯一神「アッラー」

→ 「アッラー」を信じ、ムハンマドにアッラーから下った「啓示」を信じる宗教

第3節 仏教

① 仏教の始まり

a) 開祖・・・ゴータマ・シッダールタ（紀元前566～486）

→後のブッダ（仏陀）

b) 仏教がインドで発展した背景

ア) 家畜利用の農業経済の導入

i) 農業の発展のため、家畜の牛を飼育、活用

第3節 仏教

① 仏教の始まり

イ) バラモン教の供犠儀式によって牛が減少

i) 農業の発達を阻害→重大な社会危機



バラモン教、バラモン（祭司者）への
不満が増加



新しい宗教である仏教徒が増加

第2章 宗教とカースト

第1節 カースト

- a) 起源：
 - ア) 紀元前1200～1000年頃
 - イ) ヒンドゥー教から
- b) 制度：
 - ア) 身分秩序
 - イ) 4階級（ヴァルナ）
 - ウ) バラモン（祭司者）
 - クシャトリヤ（王族、軍人）
 - ヴァイシヤ（農民）
 - シュードラ（奴隸民）
 - エ) カースト固有の職種
 - カースト内婚

不可触民（アンタッチャブル）

- ア) インド全体の10～15%
- イ) 穢れとの接触が不可避
- ウ) 非人道的差別
- エ) 孤立の集落

→カースト制＝社会分業システム

留保制度

a) 内容

ア) 不可触民＝指定カースト

イ) 少数民族＝指定部族

i) 公務員の採用枠、議席枠、教育機関の枠などを留保

ii) 留保の枠から除外の場合→反発、暴動

ウ) 留保の基準の問題

女性の人権

ア) 男性社会

イ) サテイー

i) ヒンドゥー教の悪習

ii) 夫が死亡→妻も後追い＝美德

夫の火葬の際、火の中に身投げ

ウ) 女性の地位向上は課題

宗教対立

- ア) ヒンドゥー至上主義 (サングパリワール)
 - i) キリスト教を対象に暴力事件
- イ) 貧困民がキリスト教に改宗 (優遇)
 - i) サングパリワールが抗議、暴動

宗教差別

ア) ヒンドゥーナショナリズム推進派

i) キリスト教徒の改宗の強要、他宗教への差別

イ) シャーバーノ訴訟

i) ヒンドゥー家族法、ムスリム家族法の併存

ii) 婚姻、離婚、財産分与等について宗教によって差

iii) 離婚後のムスリム女性への扶養の司法判断

→ 刑事訴訟法かムスリム家族法かどちらを優先

iiii) 最高判決は刑事訴訟法を優先

政教分離主義完遂のため宗教別家族法の廃止

→ 統一民法典制定を提唱

宗教間差別

ア) 判決に対し

i) ムスリム：宗教に対する冒とく

ii) ヒンドゥー：ムスリム家族法が成文化
不可なの不当とムスリム批判

イ) この事件は宗教間差別禁止と宗教マイノ
リティの保護の両立の矛盾が浮き彫りに

今後の展望

ア) インドの世俗主義の危機的局面

i) ガンディー：非暴力主義

ネルー：異なる価値、宗教の共存

イ) ヒンドゥー至上主義：インド内の1億人のイスラム教徒

ウ) イスラム：ヒンドゥー教徒の強圧的な態度

エ) インド世俗主義は機能、ヒンドゥー社会の故の暴動の事実は無し

今後の展望

- ア) 現在もイスラム過激派のテロ勃発
→インドのイスラム教徒の手助け無しでは無理
- イ) 1億人のイスラム社会への配慮が不足
- ウ) インド世俗主義の考えの再考が必要
- エ) ヒンドゥー教徒以外の信教者の不満解消、地位向上が先決